

プロジェクトレポート

学生チームによる小豆島プロジェクトの活動報告 2025

—地域社会から「必要とされる存在」を目指して—

中 川 啓 子

I. 概要および過年度の取り組み

追手門学院大学（以下、大学という）成熟社会研究所（以下、成熟研という）が実施する地域連携プログラム「小豆島プロジェクト（以下、プロジェクトという）」は、学生研究員主体の産学官連携活動で、2025年に9周年を迎えた。

2016年度に実施した小豆島のIターン・Uターン者を対象とした共同研究調査がプロジェクト化し、姉妹都市である茨木市と小豆島町を大学生がつなげて新しい価値を生み出しながら活性化していくことを目的に、様々な連携交流企画を継続的に実施している。

また本プロジェクトは、希望者による任意プロジェクトであり、授業やゼミといった正課活動ではないため、学生らの自主性によって成り立っている。

プロジェクトの顔ともいえる取り組みが、両都市がコラボしたクラフトビール（しそとことんシリーズ）の商品化とその販売である。その他、コラボランチメニューの発案・販売、両都市の高齢者や高校生、子どもとの多世代交流イベント、両都市の魅力を再発見する取り組み、各種祭りイベントへの参加など、活動は多岐に渡っている。

初代メンバーから引き継いでいるプロジェクトのゴールは大きく二つ。【小豆島の秋祭りへの参加】と【島でのインターンシップ開催】である。それらを意識しながら、島民との関係性を深め、島の人たちに「おかえり」と言ってもらえるような存在を目指して日々奮闘している。

本稿では、2025年度の活動を紹介しながら、特に学生の成長が見られた部分や、変化している地域との関わり方などに着目していきたい。

なお、過去に6回掲載報告しているレポートは以下の通りである。プロジェクトの立ち上がりから過年度の取り組み詳細は以下を参考にされたい。

また、学生メンバーとしてプロジェクトに参加した

のち、大学院進学後も「総合プロデューサー」という立場で後輩メンバーをサポートした小林史門氏（卒業生）の報告も、2022～2023年度の活動を知る上で貴重な資料となっているため、併せて記載する。

-
- 1：学生チームによる小豆島調査—Iターン・Uターン、産業から瀬戸芸まで～島外の若者視点を通じて—（中川，追手門学院大学 成熟社会研究所 紀要 第1号，2017）
 - 2：学生チームによる小豆島プロジェクトの活動記録—赤しそクラフトビール商品化までの産学連携と学生の成長の軌跡—（中川，追手門学院大学 成熟社会研究所 紀要 第5号，2021）
 - 3：学生チームによる「小豆島プロジェクト」6年目の進化と変化—コラボクラフトビールがふるさと納税返礼品になるまで—（中川，追手門学院大学 成熟社会研究所 紀要 第6号，2022）
 - 4：学生チームによる小豆島プロジェクトの活動報告 2022—7年目，新たな交流企画の提案と取り組み—（中川，追手門学院大学 成熟社会研究所 紀要 第7号，2023）
 - 5：学生チームによる小豆島プロジェクトの活動報告 2023—産学官連携の取り組みの多様化—（中川，追手門学院大学 成熟社会研究所 紀要 第8号，2024）
 - 6：小豆島プロジェクトでの活動を振り返って—2022年度・2023年度の活動に着目して—（小林，追手門学院大学 成熟社会研究所 紀要 第8号，2024）
 - 7：学生チームによる小豆島プロジェクトの活動報告 2024—メンバーの参加動機・目的意識について—（中川，追手門学院大学 成熟社会研究所 紀要 第9号，2025）
-

II. 2025 年度の活動

2-1. メンバー構成

2025 年 11 月時点のメンバーは合計 16 名であった。11 月のイベントを終えると、6 期生 4 名（4 年生）がプロジェクトを卒業し、また現役生 1 名も活動を休止することとなったため、2026 年 1 月時点では合計 11 名となっている。構成としては、6 期生 3 名（3 年生）、7 期生 6 名（2 年生）、8 期生 2 名（1 年生）である。6 期生は地域創造学部と社会学部、7 期生は地域創造学部と経営学部と心理学部の学部混在チーム、8 期生は地域創造学部のみとなっている。なお、男女比は、5：6 である。構成状況は表 1 に示す。

本稿執筆時点では、7 期生が中心となって運営しつつも、6 期生が全体を見守り、8 期生も自立に向けて動いている状況である。

メンバー募集に関することは、後述する。

2025.11 時点で メンバー	2026.1 時点で メンバー	6期生	4年生	   
			3年生	  
		7期生	2年生	     
			1年生	  

: 女子 : 男子

表 1 2025 年度のプロジェクトメンバー構成

2-2. 活動内容

2025 年度は小豆島・茨木市の各所と連携した様々な取り組みがこれまで以上に展開された。表 2 にピックアップした 12 の取り組みカテゴリのうち、6 割の 7 つが前年 2024 年度も実施した継続的案件であるが、同カテゴリ内での取組数自体は複数回実施しているものも多く、継続カテゴリの中での新規開拓が進んでいる状況である。

また前年度実施がないものには、完全な新規取り組み以外に、過去に先輩メンバーが実施したものが含まれている。

各企画の実施に於いては、企画・調整してまとめるメイン担当者（リーダー、窓口、プロデューサー的役割）を中心に、複数あるいは残り全員のメンバーが作

業や運営にあたるという形は例年と変わらないが、同期生の中でのつながりや学年を越えた連携は、より強くなっている印象がある。

実施日_取り組み内容（関係協力連携先） ※カテゴリ別時系列	2024年度 実施あり
(1) コラボビール販売 4/19_茨木蚤の市 2025 ～春～への参加 5/10_山手台マルシェへの参加 7/12_駅前マルシェビアガーデンへの参加 7/14-15_教職員限定コラボビールお渡し会 9/21_かどや酒店有料試飲会 (まめまめびーる, かどや酒店, FIC ベース株式会社, 茨木商工会議所, 山手台街づくり協議会)	●
(2) 8/5_オリーブフレンドリーキャンプ (茨木市, 小豆島町, 追大パーク)	●
(3) 8/25_茨木市への訪問・ヒアリング (茨木市まち魅力発信課)	●
(4) 8/27-28_瀬戸内国際芸術祭視察	
(5) 10/14-16_小豆島秋祭りへの参加 (小豆島町坂手地区)	
(6) 10/20_「わたしのみらいゼミ」との交流 (小豆島中央高等学校)	
(7) しまはらさん企画 10/25_茨木市内フィールドワーク (ダムパークいばきた, 茨木市立川端康成文学館, 茨木市立キリシタン遺物史料館)	●
(8) 姉妹都市コラボランチ企画 「ラーきく練り天」「塩レモン練り天」 (藤熊食品, 丸虎食品工業, 実都農園)	●
(9) オンラインスポーツ大会 6/25_茨木高等学校との交流会 11/18_第1回 vs. 常清の里 1/17_第2回 vs. サンシャイン会 (高齢者総合福祉施設 常清の里, 小豆島社会福祉法人サンシャイン会, 茨木高等学校)	●
(10) 11/29-30_お手伝い企画 - ①茨木市農業祭 (茨木市, 小豆島町, まめまめびーる, 小豆島手延素麺協同組合 他)	●
(11) 10/30_お手伝い企画 - ②豊川小学校との交流会 (茨木市立豊川小学校)	
(12) お手伝い企画 - ③その他地域イベントへの参加 5/18_すくくっ子まつり 5/25_中津コミセンフェスタ 10/4_山手台フェスタ (豊川地区まちづくり協議会, 豊川公民館, 中津コミュニティセンター, 山手台街づくり協議会)	

表 2 2025 年度のプロジェクトの取り組み

なお、こういった企画活動以外にも、「新メンバー募集」「新メンバー対象勉強会の開催」「報告書の作成」といった全体に係る活動も行われている。

以下、各取り組みの概要について簡単に説明する。

(1) コラボビール販売

毎年醸造を継続していたコラボビール「しそとことんシリーズ」であるが、2025 年度は新規醸造を行わず 2024 年秋発売の「しそとこ Saison」を各所で販売することに注力した。新規醸造しなかった理由としては、①前年度分が秋発売であったことでまだ在庫が一定数残っているためそれを売り切ることを優先すべきであったこと、② 2025 年は「瀬戸内国際芸術祭」の開催年と重なったことで製造受け入れをしていただいているまめまめびーが春・夏の時期に多忙となられたこと、の 2 点が主なものとなる。

また、ビール醸造が無かったため、例年開催する「しそちぎりワークショップ」も実施していない。

●茨木蚤の市 2025 ～春～ (2025/4/19)

茨木のまちづくり会社「FIC ベース株式会社」が主催するイベントである。FIC ベースには学校法人追手門学院も参画しており、プロジェクトメンバーの一人が学部（地域創造学部）の活動としても関わっていることから、出店につながった。

茨木市文化・子育て複合施設おにクル前にて、コラボビール「しそとこ Saison」を販売し 47 本の売上があった。(図 01)

●山手台マルシェ (2025/5/10)

茨木市山手台地区住民の方からの参加打診があり、コラボビール販売を行った。山手台街づくり協議会と茨木商工会議所などが主体となって開催されているイベントである。

地域の幼稚園の駐車場で開催され、ビール売上は 16 本であった。(図 02)

●駅前マルシェビアガーデン (2025/7/12)

先述した「蚤の市」と同じく FIC ベース主催イベントで、ビール販売出店の依頼を受けて参加した。会場は JR 茨木駅東口の広場・いばらきスカイパレットであり、電車利用者の目に留まる場所となる。ビールの販売と併せて、姉妹都市テーマの簡単なゲームを行い、子連れ家族などにもアピールした。

ビール売上は 31 本、また、購入者にはビールや姉妹都市や小豆島についてのメッセージカードにコメン

トをいただくなどの工夫を行った。メッセージカードには以下、様々なコメントが寄せられた。(図 03)

▽すっきりとした味、おいしかったです

▽ラベルのデザインがかわいらしい

▽明るいステキな島です

▽学生さんのプロジェクト大好きです、応援してます

●教職員限定コラボビールお渡し会 (2025/7/14-15)

大学内にてアルコール提供や販売をしないで、コラボビールに触れてもらう機会を何かの形で作れないかとの思いで検討を進めた。

取扱酒店の協力を得て、購入フォームを準備していただき、事前購入いただいた大学教員・職員のみを対象に、商品のお渡しだけを大学でイベント的に実施した。持ち帰りのみで、学内での開栓はもちろん NG となっている。

会場は校舎 1 階のオープンなエリアとし、活動パネルの展示やメンバーによる活動紹介を併せて行い、プロジェクトの学生の顔を見ていただく機会となった。

お渡し会に足を運んでもらった教職員には簡易なアンケートを実施した。以下は感想コメントの抜粋である。(図 04)

▽学生のみなさんが小豆島に愛着を持っていることが感じられた

▽良い取り組みなので、全学的に波及させていってもよいのではと考えます

▽教職員も観覧に購入できる今回の機会は、学生の声を聞くこともでき、非常に良かった

●かどや酒店有料試飲会 (2025/9/21)

茨木市内でのコラボビール販売で毎回お世話となっている酒店「かどや酒店」の店頭での有料試飲会をメンバーが企画し、実施させていただくこととなった。

330ml の半分の量をミニカップで販売する形となり、気に入った方には瓶で購入いただいた。

最終的に瓶 50 本分を販売することができ、併せて姉妹都市 PR も行った。(図 05)

(2) オリーブフレンドリーキャンプ (2025/8/5)

姉妹都市である茨木市と小豆島町、両都市の小学生を対象とした交流事業の中の「大学訪問プログラム」の依頼を茨木市から受けて 2023 年度より実施している。



図01 茨木蚤の市の様子（撮影：小豆島プロジェクト）

図04 コラボビールお渡し会の様子
（撮影：小豆島プロジェクト）

図02 山手台マルシェの様子（撮影：小豆島プロジェクト）

図05 かどや酒店有料試飲会チラシ
（作成：小豆島プロジェクト）図03 駅前マルシェビアガーデンでのメッセージボード
（撮影：小豆島プロジェクト）

本年度も本学研究企画課を通じて依頼があり、夏休み期間を活用して開催された。

なお、本年度より呼称が「いばらきフレンドリーキャンプ」から「オーリーフレンドリーキャンプ」と変更されている。

小豆島町と茨木市の小学6年生、合わせて約30名が来学した。実施にあたっては、本学の学生プロジェクトのひとつである「追大パーク」とも連携し、他団体の学生と協力しながら企画運営にあたったことが、前年度までとの大きな違いとなる。追大パークは子どもの居場所づくりに取り組む団体であることから、子ども向けのゲームや対応については経験値が高く、様々なアドバイスやアイデアをもらえたことは、小豆

島プロジェクトの学生にとっても大きな学びになった。

プログラム全体のテーマは「食育」であり、食や姉妹都市に関連したゲームやクイズを大学生と一緒にチャレンジしながら、食材カードを集め、最終的に「姉妹都市コラボランチメニュー（例：ふわふわだし巻きサンド）」が完成する趣向となっていた。コラボメニューは、過去にプロジェクトで実際に実現したものを活用し、子どもたちには各メニューのレシピを持ち帰ってもらった。

会場となった建物は、2025年春からオープンしたばかりの新校舎であり、ハンモックや芝生スペースなどのユニークな空間が点在する新校舎を存分に活用した内容となった。

またイベント担当は後輩メンバーである7期生（2年生）に任せられており、7期生にとっては同期で協力して取り組む初めての大きなイベントであり、同期生の絆が深まる機会ともなった。

参加した小学生の感想コメントは以下の通りで、小学生たちの思い出に残るプログラムとなったようである。（図06、図07）

- ▽大学に行って食材さがしをしました。それがすごくおもしろかったです
- ▽クイズがたのしかった
- ▽とってもおいしそうなお卵サンドの材料（レシピ）をもらって、家でも作ってみたいと思いました

（3）茨木市への訪問・ヒアリング（2025/8/25）

茨木市まち魅力発信課を訪問し、茨木市の知識や魅力スポットについてヒアリングした。この訪問は、8期生（1年生）が茨木市について学ぶ機会としても位

置付けており、ヒアリングの内容は後に、プロジェクトの新しい広報紙「SIO NEWS vol.2 茨木市編」にも反映されている。

（4）瀬戸内国際芸術祭視察（2025/8/27-28）

「瀬戸内国際芸術祭（略称：瀬戸芸）」は、小豆島を含む瀬戸内の島々を会場として3年に一度の頻度で開催されている国際的な芸術祭である。プロジェクトの初代メンバーは2016年に開催された瀬戸芸を訪問してレポートを作成しており、プロジェクトと瀬戸芸は縁が深い。その後しばらく瀬戸芸を訪問する機会は無かったが、今回、久しぶりに瀬戸芸でのフィールドワークを実施することができた。

島に多数点在するアート作品のうち、何を見るか、どのように回るか、移動をどうするか、など島訪問の経験が少ないメンバーで計画することは苦労や不安もあったようだが、最終的にはメンバーの意見をうまく収集し、コースを選定した。このフィールドワークには6期生・7期生（2～4年生）が全員（13名）参加しており、メンバー間の交流を深めるいい機会にもなった。さらに、4年生メンバーが「旅のしおり」をデザイン・制作して、後輩たちにサプライズで贈るという粋な計らいもあった。

参加した学生メンバーからは以下のような熱のこもった感想コメントが多数寄せられ、瀬戸芸を通じて、新たな小豆島の魅力や自分自身の気づきに出会えたのではないかと思う。（図08、図09）

- ▽小豆島の広い範囲で行動できて、存分に満喫できた
- ▽瀬戸芸の作品は自然と融合しており、街に溶け込んでいる芸術という印象
- ▽芸術祭を実際体験すると、自分と同じ世代の観光客



図06 野菜を模したゲーム＆クイズを楽しむ小学生
（撮影：小豆島プロジェクト）



図07 集めた食材カードでメニューを完成させる
（撮影：小豆島プロジェクト）

も多く訪れていると気付いた
 ▽訪れている人は若年層や外国人観光客が多く、さらなる活性化が見込めると感じた
 ▽島を巡る中で、たくさんの親切に助けられた
 ▽島の方々の小豆島に対する愛が大きいと感じた
 ▽(いつもお世話になっている島の人に) 実際に会ってお話する機会ができ、貴重な時間だった
 ▽6期7期メンバー全員で訪問できて、仲間の新しい一面を知る機会になった
 ▽目的を持ちつつ島訪問を楽しむ気持ちを8期生や今後の後輩に伝えていきたい



図08 瀬戸内国際芸術祭のアート作品
 (撮影：小豆島プロジェクト)



図09 瀬戸内国際芸術祭のアート作品
 (撮影：小豆島プロジェクト)

(5) 小豆島秋祭りへの参加 (2025/10/14-16)

I章に記載した通り、プロジェクトのゴールのひと

つは【小豆島秋祭りへの参加】であるが、2023年度にメンバー1名が担ぎ手として参加させていただいたことは、過去にも報告している。

本年度も秋祭りの時期に訪問することを決め、嬉しいことに地元の方から祭(の担ぎ手)への参加のご承諾をいただいた。秋祭り参加を成し遂げた先輩メンバーの思いを引き継いで、6期生の男子メンバー1名が歴代二人目の担ぎ手として参加した。

最初は、何時間も重い太鼓台を担ぎ続けられるのか、不安を感じていたメンバー(担ぎ手)だったが、一緒に担いだ島の方や香川大学の学生と交流していくうちに、不安は徐々に和らいだようである。次第に、太鼓台を支えている人々と「思いを一緒に分かち合えたような気持ちになった」と以後に述べており、島での秋祭りの存在の大きさを体感できた訪問であった。

他の同行メンバーからは次のような報告コメントが寄せられており、担ぎ手のメンバーに対しても、祭や島に対しても、それぞれ様々な感動や決意を得る機会となったようだ。(図10)

▽衣装の色が変わるくらい汗をかき一生懸命に担いでいる姿にとっても感動した
 ▽今回の参加を通して感じたことや学んだことを、多くの人に伝えていくことが大切だと感じた



図10 秋祭りの様子 (撮影：小豆島プロジェクト)

(6) 「わたしのみらいゼミ」との交流 (2025/10/20)

オンラインスポーツ大会でお世話になっているサンシャイン会の川西氏の紹介により、小豆島中央高等学校で実施している「わたしのみらいゼミ」で高校生との交流する機会を設けていただいた。

メンバー4名が訪問し、プロジェクトや大学生活のリアルについて、プレゼンを実施し、その後、質疑な

どを交えながら高校生との交流を行った。

小豆島中央高等学校で実施されている「わたしのみらいゼミ」は“島のことを知り、地域や世代を超えた交流体験を行う”もので、主に放課後の時間を活用して、希望する高校生が参加している。今回は6名の高校生が参加し、メンバーと交流を行った。(図 11)



図 11 小豆島中央高等学校での交流の様子
(撮影：小豆島プロジェクト)

(7) しまはらさん企画

「しまはらさん企画」と呼ばれる本企画は、過去の在籍メンバーからのつながりで交流が続いている小豆島の島原氏のご協力や紹介で行う企画全般である。

体験や展示を通じて、茨木市と小豆島の二つの都市の魅力をも市民・島民に伝えていこうとするもので、過去には、島の子どもたちとの交流イベントなども実施した。

●茨木市内フィールドワーク (2025/10/25)

今年度は、茨木市の魅力を小豆島や茨木市民にもっと伝えるための材料を集めるべく、市内フィールドワークで現地に足を運び、それらを整理して手描きマップとしてまとめる活動を行った。

訪問先は「ダムパークいばきた」「茨木市立川端康成文学館」「茨木市立キリシタン遺物史料館」となっており、学生が実際に体験・見学して感じたことをイラストや写真を使ったマップに仕上げた。

マップは11月の茨木市農業祭のブース内で展示して来場者に見ていただいた。今後も機会があれば展示・活用していく予定である。(図 12)

(8) 姉妹都市コラボランチ

2022年度から取り組む、小豆島と茨木の食材を使った、地産地消のコラボメニューを考案する企画である。



図 12 完成した魅力マップ
(撮影：小豆島プロジェクト)

2025年度は前2024年度と同じく「有限会社藤熊食品(茨木市)」の協力を得て「練り天」を商品化した。前年度は1種類であったが、今回は2種類となっており、1つは「丸虎食品工業(小豆島)」のラー油きくらげを使用した「ラーきく練り天」、もう1つは「実都農園(小豆島)」のグリーンレモンを使用した「塩レモン練り天」である。

前年同様に、企画を考えただけでなく、藤熊食品の工場を休日にお借りして、現場で指導いただきながら、ねり天を材料から製造した。11/29-30に開催された茨木市農業祭のブースでは、現地で揚げたてを販売し、二日間で約320個を完売することができた。どちらの商品も、購入した方から好評であった。(図 13)



図 13 ラーきく練り天 (撮影：小豆島プロジェクト)

(9) オンラインスポーツ大会

茨木市および小豆島の多世代交流の促進を目的に、継続的に開催しているオンラインスポーツ大会であるが、本年度は、茨木市の福祉施設の新規開拓と前年度にアプローチした茨木高等学校との開催を視野に入れて取り組みを進めていった。

まず福祉施設の新規開拓については、5月に参加した茨木市豊川地区のイベント「すくくっ子まつり」にて、市内の福祉施設「常清の里」を紹介いただけたことで、訪問・活動紹介を経て、【小豆島プロジェクトの学生 vs. 常清の里】の対戦（2025/11/18）を実現することができた。

茨木高等学校については、訪問（2025/6/25）して交流＆調整を進め、1月に【茨木高等学校 vs. サンシャイン会（小豆島）】の対戦を開催する段取りを整えたのだが、事情により高校側の都合がつかなくなったことで、最終的に【小豆島プロジェクトの学生 vs. サンシャイン会】の対戦に変更して実施した（2026/1/17）。

対戦内容の競技は手先を使う簡単なものであるが、輪投げの輪の大きさを変えて学生と高齢者の難易度を均したり、身体を動かす競技だけでなく視覚を使ったもの（四つ葉のクローバー探しなど）を取り入れたりするなど、毎回様々な工夫を凝らしている。

今後は、茨木の高齢者と小豆島の高校生をつなぐパターン、延期となった茨木高等学校との開催など、引き続き積極的に取り組んでもらえればと考える。（図14、図15）

(10) お手伝い企画 - ①茨木市農業祭（2025/11/29-30）

プロジェクト主催ではなく、地域の各所からお声かけいただきイベントに参加する案件を「お手伝い企画」と名付けている。

その中でも継続的に参加しているものが、茨木市主催の“都市と農村の交流イベント”と位置付けられた「茨木市農業祭」である。本年度も出店・出展参加できることとなり、これで通算4回目となった。

茨木市役所の向かいにある中央公園グラウンドで、土日二日間に渡って開催され、姉妹都市の茨木市と小豆島町から多くの出店・出展があり、市民来場者で賑わうイベントである。

プロジェクトは「①ブース出展（パネル展示、クイズ企画）」「②小豆島町出店ブース企業の手伝い」「③飲食の提供（練り天販売）」「④ステージイベント手伝い（福引）」を行った。



図14 常清の里とのオンラインスポーツ大会
（撮影：小豆島プロジェクト）



図15 サンシャイン会とのオンラインスポーツ大会
（撮影：小豆島プロジェクト）

①で「プロジェクト新聞」と呼ぶメンバーが作成した壁新聞的レポートをパネル化して展示するのは前年度同様で、新しく制作された号を中心に掲示を行った。併せて、本章（7）に記載した、手描きの茨木市魅力マップのポスター展示も行っている。

②ではオリーブや醤油会社、素麺組合など、小豆島から来販している企業ブースの販売活動の手伝いを行った。（1）に登場するまめまめびーによる小豆島のビール販売も行われた。③では（8）に記載した地産地消メニューである「練り天」を2種、調理販売した。（図16、図17）

(11) お手伝い企画 - ②豊川小学校との交流会（2025/10/30）

5月に参加した「すくくっ子まつり（茨木市豊川地



図 16 農業祭の様子（撮影：小豆島プロジェクト）



図 18 すくくっ子まつりの様子（撮影：小豆島プロジェクト）



図 17 農業祭の様子（撮影：小豆島プロジェクト）



図 19 中津コミセンフェスタの様子
（撮影：小豆島プロジェクト）

区)」との出会いから、同地区の豊川小学校とのご縁が生まれ、交流会（10/30）に呼んでいただいた。

対象は小学2年生で、姉妹都市をテーマにした〇×クイズやパズル、魚釣りゲームを行い、小豆島のことを楽しく知ってもらう機会とした。

学生メンバーからは以下のようなコメントがあり、小学生を巻き込んだ世代交流を広げていければと考えている。

▽この交流会の話を家に帰ってから親御さんに話してもらえたら嬉しい

▽一度きりで終わらずに今後も豊川小学校と交流を続けたい

（12）お手伝い企画 - ③その他地域イベントへの参加

●すくくっ子まつり（2025/5/18）

地域からのお声かけで地元のお祭りに参加させていただいた。会場は茨木市の豊川小学校運動場である。ここでは姉妹都市テーマでミニゲームなどを実施したが、そこで配布する景品については地元の子ども食堂



図 20 山手台フェスタの様子
（撮影：小豆島プロジェクト）

から寄付でのご提供があった。プロジェクトの取り組みに賛同いただけたとのことで、学生にとっても大変ありがたいお申し出であった。このお祭りでの出会いは、その後、オンラインスポーツ大会や小学生との交流会など、新しい出会いに発展していった。(図18)

●中津コミセンフェスタ (2025/5/25)

こちら地域のお声かけで参加することとなったイベントである。その名の通り、茨木市の中津コミュニティセンターで行われた。模擬店や展示などが多数の出店・出展があり、プロジェクト新聞の展示もさせていただいた。また、模擬店のお手伝いをして住民の方と交流し、活動や姉妹都市の周知に奮闘した。(図19)

●山手台フェスタ (2025/10/4)

5月にコラボビール販売で出店した「山手台マルシェ」のご縁から、再度地元からお声かけいただいたイベントである。

今回はビールではなく「姉妹都市PR活動」に注力し、プロジェクト新聞の展示や姉妹都市クイズなどを実施すると併せて、簡単なシール貼りアンケートを取りながら、姉妹都市の認知度を調査した。

様々な世代の方が来場する比較的大きめのイベントであり、これまでのイベント参加で蓄積してきたツールやアイデアなどを活用する場になった。(図20)

2-3. 広報活動ツール

2025年度に制作した広報ツールおよびグッズは以下である。新たなニュースペーパーの発行やオリジナルキャラクターづくりなど、世代や場面での使い分けも意識し、工夫しながら意欲的に取り組んでいる。

(1) プロジェクト新聞

※プロジェクト新聞：活動を紹介するA4サイズ2-4ページ程度の壁新聞風レポート。企画ごとに担当学生が製作にあたり、各種イベントでの配布・展示、外部の方への説明資料として使用している。

① 2024 しそとこ Saison 編

(コラボクラフトビールの報告)

② 2024 姉妹都市コラボランチ編

(姉妹都市オリーブ練り天ポップ)

③ 2024 茨木市農業祭編

④ 2024 しまはらさん企画編

(小豆島の高校生との交流報告)

⑤ 2024 オンラインスポーツ大会編

⑥ 2025 小豆島小学6年生追大訪問企画編

(オリーブフレンドリーキャンプの報告)

⑦ 2025 秋祭り編 (図21)



図21 プロジェクト新聞 最新号

(作成：小豆島プロジェクト)

(2) SIO NEWS

小中高校生など、子ども向けの広報物として新たに登場したのが「SIO NEWS」である。内容は、小豆島・茨木市について、プロジェクトが関わったものや場所を交えて紹介するもので、小豆島編がvol.1、茨木市編がvol.2となっている。各種イベントで印刷して配布したり、ポスター展示をしたりして活用している。(図22)



図22 SIO NEWS 左から vol.1 vol.2

(作成：小豆島プロジェクト)

(3) おりいばくん

今期、プロジェクトの公式キャラクター「おりいばくん」が誕生した。これまで様々なイベントでお世話になっている両都市のキャラクター「オリーブしまちゃん（小豆島）」と「茨木童子（茨木市）」にインスパイアされた造形で、オリーブのような丸っこい顔に茨木童子からイメージした鬼の角帽子と金棒を身に着けたゆるキャラである。学生メンバーによれば、語尾に「～まめ」と付けて話す設定とのことだ。

「おりいばくん」のネーミングは、メンバーで募集したものから候補を絞り込み、最終的にかどや酒店での有料試飲会のイベントでお客さんに投票をしていただき決定した。オリーブの「おり」と茨木の「いば」からできているのは言うまでもない。

瀬戸芸訪問の旅のしおりでデビューを果たし、その後も各種イベントでお面やぬりえやステッカーとなってフル活用されている。

次年度以降も様々な場面で、姉妹都市 PR に一役買ってくれることが期待される。（図 23）



おりいばくん
小豆島プロジェクト公式キャラクター

図 23 おりいばくん
(© 小豆島プロジェクト)

2-4. メンバー募集

(1) 1 次募集

8 期生の募集にあたっては、前年同様に、学生メンバーらが地域創造学部 1 年生の授業でプロジェクト説明プレゼンを行い（2025/4/25）、それをプロジェクトの SNS で発信した。成熟研の方では、大学のアプリを通じて 1 年生を対象に募集案内を一齐配信するのと併せて、学内サイネージに掲出する形でサポートした。

6 月上旬に募集を締め切り、応募のあった 5 名については現役メンバーが個別にオンライン面談を行い、最終的に 3 名の男子学生（1 年生）が 6 月下旬から参加することとなった。これまでプロジェクトメンバーは全体的に女子が多く、男子だけの学年というのは初

めでであった。このことは何か新しい風をプロジェクトにもたらしてくれるかもしれないと、期待するメンバーもいた。

例年記載しているが、成熟研（教職員）はメンバー面接に関してはノータッチであり、結果報告を受けるのみとしている。誰を選ぶか、何を基準にするのか、何人選ぶか、という判断は全て現役メンバーに委ねている。

なお、面接は通常「しそぢりワークショップ」の会場で同時開催されているが、今期はビール作りが無かったことでワークショップが行われておらず、面談をオンラインのみに変更した。ただ、やはり対面で話をしてみて感触をつかみたいという声は、学生メンバーからもちらほらと聞かれた。（図 24）

新メンバー募集!

- ・活動に一生懸命な人
- ・販売、営業、案出しに興味がある人
- ・地域との交流を学生主体で行いたい人
- ・ボランティア活動や地域活性化に興味がある人
- ・茨木市と小豆島の姉妹都市交流であることや、プロジェクトには 2 つのゴールがあることを理解している人を募集しています!

この活動に興味のある人、参加してみたい人は、

インスタの DM から連絡してください!



図 24 新メンバー募集のサイネージより

（作成：小豆島プロジェクト）

(2) 2 次募集

通常募集時期（春）の応募数が、例年より少なかったことで、夏休み後半に 2 次募集を行うことを決定した。ただ、秋学期の授業期間に入る前に応募締切としたことで（秋以降の活動の関係による）、期待した応募はなく、最終的に 2 次募集で加入したメンバーはいない。次年度の募集をどう工夫していくかは検討課題として残った。

2-5. 新メンバー対象勉強会の実施

7 月から 8 月にかけて、新規加入したメンバーを対象に、プロジェクトのこれまでを学ぶオンライン勉強会が実施される。過去のメンバーが作成した年度末報告書を読み込んでプロジェクトの経緯や目的などを理解し、自分事にしていくことが目的である。

今期は全 7 回の勉強会を実施、その内容を受けて新入生たちはプレゼン資料を協力して取りまとめ、発表練習を行った。その後、11 月に成果発表会（2025/11/7）がオンライン開催された。

なお、学生は授業やアルバイトなどの都合もあり集まるのは夜遅い時間が定番のようで、今回の発表会も平日夜の23時スタートとなっている。

発表会には、先輩メンバーに加え、OBメンバーも複数都合をつけて参加してくれている。今回は筆者も初めて発表会に参加し、1年生3名が苦労してまとめあげた1時間を超えるプレゼンを聞かせてもらった。

プロジェクトの活動が毎年積みあがっていくのと同時に、この勉強会で学ぶ内容は1年分ずつ増えていく。2016年からスタートした10年分の膨大な活動の軌跡は、伝える方も伝えられる方も大変であったと推察する。勉強会という形で、先輩たちの活動をしっかりと継承している学生メンバーには頭が下がる思いである。

Ⅲ. プロジェクトの成果と期待

2025年度のプロジェクトの成果とそこからの生まれる期待について、以下4つのキーワードで振り返っていききたい。

「多世代交流」「地域との対話」

「主体性」「継承」

(1) 多世代交流

茨木市と小豆島の両地域において、小学生から高齢者までを巻き込んだ多世代交流を複数実現することができた。小学生対象の「オリーブフレンドリーキャンプ」では、姉妹都市の魅力発信と併せて大学を身近に感じる体験の場を創出した。また、高齢者施設との「オンラインスポーツ大会」や高校生との交流会を通じ、世代を超えて「元気な時間」を共有できたことは、福祉・教育の側面からも意義深いのではないかな。

単なるイベント実施に留まらず、各世代のニーズに合わせた交流の場を提供できたことは、姉妹都市の認知度向上と併せて、地域コミュニティの活性化にも寄与したと言える。

今後も小学生、中高生、親子、高齢者など様々な世代間の架け橋となりながら、一度いただいたご縁も大切につなぎ続けてもらいたい。

(2) 地域との対話

これまでの最多となる、計7回に及ぶ地域イベント(2-2. (1) (10) (12) 参照)への参画は、地域や地元企業、行政と「顔の見える関係」を構築することにつ

ながった。特に、外部イベントでのビール販売とお手伝い企画には、「出展・出店してほしい」という依頼をいただいたものが多い。今まではプロジェクトを知っていただく活動を地道に続けていたが、徐々にプロジェクトが「外部から必要とされる存在」へと成長しているのである。

また、茨木市内のイベントに多数関わり、多様な参加者と対話ができたことも、今期の特徴である。特に豊川地区のすくくっ子まつりをきっかけに、豊川小学校や常清の里といった新たなつながりが生み出されており、地域イベント参加と住民とのコミュニケーションを通じて活動を発展させられたことは、学生メンバーに、対話と交渉の力がしっかりと根付いてきていることを感じる。

(3) 主体性

一年を通じて大小20を超える多様な企画において、学生たちは自ら考え、行動し、道を切り拓く姿勢で取り組んでいる。成熟研は、原則アドバイスや学内手続きをサポートするのみで、やるやらないに関して口を出すことはせず、判断はプロジェクトの学生に任せることを基本としている。

主催企画にしても、参加型(お手伝い系)企画にしても、やるかやらないか、受けるか受けないか、どんな内容にするか、何が必要か、誰が分担するか、など、考えて決めなければならない無数の事項には、学生自身が向き合い、一つずつクリアにしていって

その中で「自分たちがやりたいことをやる」だけではなく、「来年度も声をかけていただけるように」という責任感を持ち、しかし自分たちがちゃんと楽しむことも忘れずにいる。現場で困難に遭うことも多いが、企画グループの枠や学年の壁を超えて相談協力しながら、全ての企画を完遂させた。

こうして主体的にプロジェクトを推進した経験は、社会で生きる大きな財産となるはずである。

(4) 継承

夏に実施した「オリーブフレンドリーキャンプ」は、7期生(2年生)中心の運営体制を敷いていた。7期生にとっては初めての大きなイベント運営でもある。その中で、上級生が下級生を信頼し、任せて託している姿が印象的だった。

また、小豆島での秋祭り参加では、卒業した先輩たちの想いを背負い、担ぎ手不足という地域の課題解決に貢献することで、伝統文化を守る一助を担った。単

年度の活動に終わらず、過去からのバトンを受け取り、未来へ繋ぐという「継承」のプロセスを学生自身も強く意識した1年であったのではないか。

2025年度は「追手門学院大学に小豆島プロジェクトという活動がある」ということを広く知らせ、また知られていっていることを実感できた年度であったのではないだろうか。

もちろん、まだまだ一般的な認知度が高いとは言えないのだが、茨木市や地域団体の側から声がかかる存在になってきたことは、これまでの取組みが評価され、地域に求められる活動を還元できている、つまりは「地域社会から必要とされる存在」に成長してきていることの証と考える。

学生メンバー側も大きな自信を得て活動意義を感じたであろうし、プロジェクトをやってよかったと思える経験になったであろう。この思いと経験が、さらに次の学年に、そしてこれから入学してくる学生たちに、継承されていくことを願ってやまない。

最後に、小豆島プロジェクトの活動を支援・応援いただいている小豆島と茨木市の連携先、大学関係者、協力者、卒業したプロジェクトOB・OGの皆様に、この場を借りて御礼を申し上げたい。引き続き学生たちを応援いただければ幸いである。

参考文献

- 中川啓子（2017）.「学生チームによる小豆島調査」『追手門学院大学成熟社会研究所紀要 第1号』
- 中川啓子（2021）.「学生チームによる小豆島プロジェクトの活動記録」『追手門学院大学成熟社会研究所紀要 第5号』
- 中川啓子（2022）.「学生チームによる『小豆島プロジェクト』6年目の進化と変化」『追手門学院大学成熟社会研究所紀要 第6号』
- 中川啓子（2023）.「学生チームによる小豆島プロジェクトの活動報告 2022」『追手門学院大学成熟社会研究所紀要 第7号』
- 中川啓子（2024）.「学生チームによる小豆島プロジェクトの活動報告 2023」『追手門学院大学成熟社会研究所紀要 第8号』
- 小林史門（2024）.「小豆島プロジェクトでの活動を振り返って」『追手門学院大学成熟社会研究所紀要 第8号』
- 中川啓子（2025）.「学生チームによる小豆島プロジェクトの活動報告 2024」『追手門学院大学成熟社会研究所紀要 第9号』